

認知症と意志決定

よく聞かれる誤解に認知症の人は判断なんかできない
ということがあります。果たしてそうでしょうか？

事例でその理解は違っていることを示してみたいと思います。
長岡京市に1人で住んでいるフミさんは83歳。彼女は重い心不全と認知症
を抱えています。

当初わたしたちが関わりを始めた頃、医師への通院もできず、服薬もまともにできて
はいませんでした。そのために体調は悪化し、危機的な状況に。そんな彼女の生活はケ
アプランの変更で徐々に改善が図られていました。しかし、これまでのツケが出たので
しょう、急激に体調が悪化し入院することになりました。

病院の医師は「この人が自宅で暮らすのはムリ」と判断し、療養施設に彼女を送り込
みました。

すると彼女の体調は良くなるどころか悪くなっていきます。

わたしたちと成年後見人は彼女を家に帰してみよう。その準備に老人保健施設への
利用で時間を稼ごうと考えました。

しかし、一向に彼女の体調は回復しません。やむを得ずそこから入院を予定して
病院を受診させました。

彼女はそのときどうしたのでしょうか？

認知症のある彼女はうまく他者に気持ちを伝えることができません。
だから病院の駐車場で精一杯抵抗。病院の看護師さんが何とか診察室に
運びました。そして診察した医師は「この人は心不全終末期で入院治療は該
当しません」と判断しました。そのためわたしたちと後見人は「ならば最後は自
宅で過ごさせてあげよう」と一人暮らしに戻す決断をしました。それは昨年の
秋のこと。

家族も後見人もわたしたちもお正月までに彼女の人生は終わるだろうと考えて
いました。

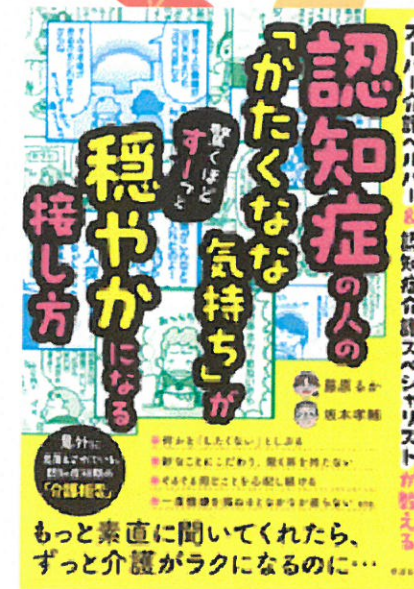
ところがどうでしょう。彼女は何回かの入退院はあるものの、
ご自宅で穏やかに暮らしています。

訪問看護は定期的に訪問。訪問介護は一日に3-4回は訪問。通所介護
も週に2回は利用して彼女の生活は守られています。

彼女が病院の駐車場で「暴れた」時、彼女が伝えたかったのは「わたし
をどこにもやらないで」という意思を暴れるという形で表現していたので
す。

話題変わって、認知症の高齢者を「どうせわからない」
と本人の意思を聞くことも無く、施設や療養施設におくることが
世間では見られます。

なかなか想いを伝えられない認知症の高齢者の方、
どんな思いでいるのでしょうか？



発行 すばる舎
著者 藤原るか 坂本孝輔
ISBN 978-4-7991-1134-5

定価 1540 円

著者は30年以上の現場経験を持つホームヘルパーの藤原さんと
介護福祉士として認知症のケアに関わる坂本さん。

お二人が現場で出会ってきた認知症高齢者の「かたくなな気
持ち」をケア実践を通じてほぐしていく過程が面白い。
なぜ認知症高齢者はこんな発想に陥るのか、その理屈が
わかれば家族も現場も違ったアプローチができます。
家族、支援者の介護はこうあるべきというかたくな
な気持ちもほぐしていくことがよりよいケアの出発
点です。

有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイツ東台101号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

E-mail info@fukushi-club.com

きょうと福祉倶楽部ホームページ

